



Title	『夢の通ひ路物語』主題分析（三）：六条の君入水譚にみる恋愛観
Author(s)	井, 真弓
Citation	詞林. 2009, 46, p. 22-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67602
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『夢の通ひ路物語』 主題分析 (三)

——六条の君入水譚にみる恋愛観——

井 真弓

はじめに

一条権大納言の子でありながらも帝の子として育てられている三の御子に、母親である京極三の君と一条権大納言の悲恋が描かれた巻物を托し、拘泥する自らの出生の秘密から三の御子が脱却する可能性を示すことこそが『夢の通ひ路物語』の主題であった¹⁾。これは、冷泉帝が自らの出生を知りながらもそれを克服しえなかった、あるいは父である光源氏の側に冷泉帝を救済しようという意志が全く見られなかった『源氏物語』の展開のアンチテーゼであると言える。

『夢の通ひ路物語』の巻物部分是一条権大納言自身の手になるものと考えられ、一条権大納言と京極三の君との間の子が帝の子として誕生するに至った経緯が詳述されているのだが、その中には三の御子の出生とは無関係に見える「岩田中将とかざしの君の恋愛譚」が挿入されている。岩田中将とかざしの君の物語については、その特徴から継子(いじめ)譚²⁾あるいは無実の罪による流罪譚³⁾として捉えられることが多く、

物語の主題である三の御子の出生とは独立した挿話として認識されてきた³⁾。しかし、物語構造や人物設定を詳細に分析した結果、外的要因によって課せられた困難に翻弄された人生を歩むという点において、岩田中将は一条権大納言あるいは三の御子と類似した人物として造型されていることが明らかになった。そして、そのような不如意な環境に置かれた際にも信仰心を忘れずに誠実かつ真摯な生活を送る岩田中将の生き様は、三の御子の生き方に大いに参考になるものであり、これを一条権大納言が三の御子に呈示したかったがために巻物中に挿入されたものと考えられる³⁾。

このことを踏まえて『夢の通ひ路物語』の登場人物を改めて捉え直してみると、主題に関わる重要人物として一条権大納言、京極三の君、三の御子があり、さらには「岩田中将とかざしの君の恋愛譚」には岩田中将、かざしの君、かざしの姫君、三条少将らが登場し、それぞれに恋愛関係を結んでいる。一条権大納言のグループと岩田中将のグループとは、物語内での直接的な関連性には乏しいものの、三条少将が京極

三の君あるいは三の御子の後見的存在であることから、最終的には三の御子を中心とした人間関係の輪を構成していることがわかる。このように三の御子を中心に据えることによつて、これまで無関係と思われていた「岩田中将とかざしの君の恋愛譚」が主題と密接な関わりを持っていることが示された。

ところが、『夢の通ひ路物語』にはこの他にも三の御子に全く関わらない六条の君という女性が登場し、一条権大納言との間の一時的な恋愛についてかなりの紙面が割かれている。六条の君は一条権大納言に好意を寄せられるが、やがて夫である大夫監に連れられて筑紫へ戻る際に入水をし、亡くなる。先行研究では、六条の君の「入水」という部分ばかりが注目されており、『狭衣物語』の飛鳥井姫君や『源氏物語』の浮舟の影響が指摘されている。工藤進思郎氏は「入水譚を描くことが作者の狙い」だとし、安道百合子氏は「作者が先行物語についての教養を取り入れて、新しい物語を生み出している」と、六条の君物語がいかに物語取りをしているかを強調しているが、いずれにおいても主題である一条権大納言の物語とは無関係な独立したストーリーであると認識されている。確かに六条の君に関する部分は、他の物語部分との関連性が少なく、六条の君の登場も唐突であることは否めない。それでも物語全体の中で設定が破綻することなく調和しており、物語の主題を表現するという要請から六条の君物語が挿入さ

れたと考えることは不自然ではないし、むしろそのような観点からの解釈こそが本筋であろう。本稿では、主題との関わりを念頭において六条の君物語を捉え直し、新たな解釈を試みる。

一 『夢の通ひ路物語』における人物設定の特徴

ここで、改めて『夢の通ひ路物語』における人物設定の特徴を整理しておこう。この物語は巻五の末尾に本文とは別筆で奥書が書き添えられてあり、「此の六帖の物語、その作者を知らざれども、源氏狭衣などの心ばへにて、つれづれの筆のすさびに書き流しけむ、情け深く見ゆ。」(二一五頁)と、『源氏物語』の影響を強く受けていることが知られており、先行研究においてもいわゆる『源氏物語』取りが数多く指摘されている。登場人物もまた『源氏物語』にそのルーツを見ることができ、特に『源氏物語』に登場する複数の人物の設定を重ね合わせて一人の人物に集約するという手法が多く見られる。例えば一条権大納言は光源氏と柏木の要素を、京極三の君は藤壺と女三宮の要素を有していると考えられる。本章では、特徴的な人物として藤壺女御を取り上げてみよう。一条権大納言の母である大宮には女子がいなかったため、蓬生の御方所生の外腹の女子を引き取り養育し、入内させようとする。その女子が藤壺女御として入内する際の詳細は本文中に記されていないが、やがて帝の寵愛を受けて一の御子(後

の東宮)を懷妊、出産する。このような流れは、『源氏物語』において、実子を持たぬ紫の上によって大切に養育されて入内し、後に皇子達を出産している明石の姫君と類似していると言えよう。明石の姫君は「(明石の姫君の)心の内には、『我が身は、げにうけばりていみじかるべき際にはあらざりけるを、対の上(＝紫の上)の御もてなしに磨かれて、人の思へるさまなどもかたほにはあらぬなりけり。身をばまたなきものに思ひてこそ、宮仕へのほどにも、かたへの人々をば思ひ消ち、こよなき心驕りをばしつれ。』(若菜上巻・九四頁)と、継母(養母)である紫の上の手厚い養育により、今の自分の立場があることを認識し、強い感謝の念を抱いている。これは藤壺女御が死の間際に養母大宮に対して『かく養はれたてまつりて、雲居の交じらひにも、身は数ならぬさまながら、さやうの御陰に覆はれて、人には殊に越えつるもみな誠に深き(大宮の)御心ざし故にこそ』と思へば、いとかたじけなさのおきどころなくおぼえて」(二二二頁)のよう「自らが入内をし、帝の寵愛を受けることができたのは、大宮の深い愛情によるものだ」とその恩に感謝していることと合致する。

一方で『夢の通ひ路物語』での藤壺女御は帝に溺愛されており、そのあまりの寵愛ぶりに麗景殿女御(按察使大納言の女)を始めとした他の女御たちに嫉妬され誹謗中傷にさらされることや、懷妊のために里下がりをお願いした藤壺女御を手

放さない帝の姿、御子の誕生、嫉妬に狂った麗景殿女御の物の怪に取り憑かれて藤壺女御が衰弱死し、帝や養母大宮が悲嘆するといった一連の物語展開は、『源氏物語』の桐壺更衣を明らかに模しており、明石の姫君との設定の二重性を指摘することができる。

このように藤壺女御は『源氏物語』の複数の人物設定を取り入れているが、それだけではなく『夢の通ひ路物語』の主題展開においても複数の重要な役割を担っている人物である。ひとつには岩田大納言が藤壺女御に懸想し、恋文を送ろうとしたことに端を発した岩田中将の流罪、岩田大納言の自死、かざしの君の困窮といった一連の事件を引き起こす原因を作り出しており、これは『夢の通ひ路物語』の中にある挿話「岩田中将とかざしの君の恋愛譚」の出発点ともいえる重要な役割である。

さらに、藤壺女御が亡くなった後には、その死をなかなか受け入れることができない帝や養母大宮による形代探しによって、一条右大臣の外腹の娘である対の君およびその養女格である六条の君が登場し、一条権大納言の六条の君への求愛、六条の君の入水といった一連の出来事や、藤壺女御に似通う京極三の君の入内とその結果として的一条権大納言の悲嘆および絶望といった展開を引き起こす要因ともなっている。

このように、藤壺女御には『源氏物語』における明石の姫君と桐壺更衣の人物設定が投影されており、さらに岩田大納

言や帝の強い執着が描かれることによって非常に印象的な人物として造型されている。このように『夢の通ひ路物語』では、比較的少人数の人物に複数の役割や、『源氏物語』における複数の人物設定を重ね合わせることによって、凝縮された物語世界を構築しており、人物間のやりとりを濃密なものとすることに成功していると言えよう。

同様のことは、『源氏物語』における藤壺女御と女三宮の要素を併せ持つとされる京極三の君や、本稿にて取り扱う六条の君についても指摘することができる。六条の君は巻四に初めて登場し、一条権大納言の異母姉である対の君が母代となつて世話をしている姫君である。筑紫の大夫監の強引な求婚によって妻とされてしまい、一時は筑紫に暮らしていたが、療養のために上京し、対の君を探していた一条右大臣と共に後、夫の大夫監に連れ戻されることとなり、帰途中に一条権大納言からの手紙を受け取つた直後に入水する。

六条の君の全体的な人物像は、表面的には『源氏物語』における空蟬に酷似しており、中流階級の妻である六条の君(空蟬)が、都の貴公子である一条権大納言(光源氏)に心引かれつつも、その恋情を受け入れることがなかったという流れは空蟬にまつわる物語の焼き直しであると言えよう。それに加えて、筑紫の大夫監に求愛されて結婚、筑紫から上京するという設定や、一条右大臣邸に引き取られる経緯、空蟬に

比べて魅力的に描かれている容姿などからは六条の君が玉鬘の要素をも有していることが示唆される。さらには入水するという点においては浮舟の物語を踏まえていると考えられる。このように凝つた人物設定を与えられた六条の君であるが、物語展開という面においては、『夢の通ひ路物語』の主題とは無関係であるとの捉え方が主流であった。そこで、次に六条の君の心情に着目して分析を行い、彼女が入水に至つた理由の考察を行う。

二 六条の君の心情分析

六条の君の父である六条少将は、娘を入内させる願望を持っていただけだが、位が低かつたことや、早くに亡くなつてしまつたことから六条の君には有力な後盾がおらず、その願ひは叶わなかつた。当初筑紫の大夫監の強引な求婚を拒んでいた六条の君は、大夫監とゆかりのある対の君(一条権大納言の異母姉)の説得により婚姻を承諾し共に筑紫に下るが、六条の君の病のため対の君と共に上京し、一条右大臣に引き取られる。

対の君が語るには、六条の君の病は「氣の方のやうに悩みたまひて、京の方も恋しげにしたまへば」(一四五頁)と、彼女の気持ちから生じたものであるという。そして侍従が「日頃悩みたまふさまの、ここぞいたきこともはべらざりしが、ふと胸病みたまふる人(六条の君)にて、いづこにももの

憂く扱ひ倦んじたまへしに、此度は耐へ難くものしたまひて、
まいて咳き上げたまふこと、度ごとにさぶらふ。氣の方にて
はべれば、頼み少なうみずからにもおぼし嘆きたまふさま」
(二六二頁)と、病状はひどくはないのだが、本人の気持ちか
ら生じた病であるがために、もはや長く生きることができな
いと六条の君が嘆いていると語る。

一体病になるほどに六条の君が思い悩んでいることは何な
のであろうか。「京の方も恋しげにしたまへば」とあるよう
に、一つには氣の進まぬ大夫監との結婚に原因があるのは確
かであろう。大夫監は六条の君に対してA傍線部のように溺
愛したようであるが、療養のための上京を「ことづけて心軽
きこともこそ」(二四五頁)と浮気を疑い、許そうとしない。

そして上京した六条の君を強引に連れ戻そうする大夫監に対
して、六条の君は「こよなうむくつけき」(二六六頁)と非常
なる恐怖感や不快感を抱いている。六条の君が京を恋しく思
い、「世づかぬ心にて思ひ嘆」いたのは、このように都の貴
公子たちとは異なる大夫監の無骨な態度によるものと推測で
きる。

A … (大夫監は)いとよきほどは、比べむ方もなきまで誰
をもちしげけど、むらむらしきに、若き人(＝六条の君)
は世づかぬ心にて思ひ嘆きはべるやうにさぶらへど、
『親の教へ背かじ』とつれなう隔てぬ心にもいささかも
漏らさで、二元よりもなほ頼みわたりはべる心ざしも、か

ついとかなしう思ふ思ふ三とせばかり過ぎけり。(二四五頁)

大夫監の強引で無粋な態度に対して、六条の君は「老い
て憂き身の末に見苦しき名をや漏らさん」とおぼし嘆き
(二六七頁)、「とかうあらがひたまひても、さる猛きもののふ
心にて押し立ちばべらば、誰も誰もいとしき御名もおのづ
から漏ればべらめ。『六条の君は』さる方にて失せぬる身ぞ」
ともろともひたぶる思ひなして、下したまへ。(二六七頁)
に示されるように、自らが我を張れば見苦しい憂き名を自分
のみならず六条家にも負わせてしまうことになることと諦観し、
逆らうことなく大夫監に従うのであった。

このように六条の君は己の感情を抑制し、自らよりも他人
のことを人一倍気に掛ける性格の持ち主である。例えば、
「誰も誰もいとしき御名」が漏れることを気に掛け大夫監
と共に再度下向を決意しているばかりか、先に挙げたA点線
部のように、親の教えを非常に重んじ、従順であったことか
ら自らの苦惱を打ち明けることができずに病になっている。
また対の君を引き取りたいという一条右大臣の意向に対して、
六条の君は以下のB傍線部のように「対の君の幸せを自分が
妨げることは罪深いことだ」と思い、「自らの身よりも親の
仰せごとを重んじなくてはならない」と身をひくことを決意
している。

B … (六条の君は)うち泣きて、ものもえ聞こえたまはず。

「いかにせばや」ともの憂くおぼしなから、「さやうの
(対の君の)御幸に妨げたてまつる身こそ、いよいよ罪
深きことと嘆かれはべれ。…また憂き身一つは、いと軽
きことなれば、『渚にさすらふとも、親の仰せこそ重け
れば』とあきらめて、はるけき方にも御心どもにこそま
かせさぶらはん」と、例のしめやかに、気配のらうらう
じうやはらかなるに、… (一四七頁)

対の君は血のつながりのない母代であるが、六条の君は
「いかさまにも前の世に親などにてもものしたまひつらめ」
(二四八頁)と、実の親のように慕っており、対の君の存在や
意向は彼女にとっては絶対的なものであったと考えられる。

共に上京した対の君が一条右大臣邸に移ると六条の君の病
状は悪化し、六条の君自身も「心ながらいふかひなのわざや
思ひ離れ、聞こえたてまつりしことも偽りにこそ(対の君は)
おぼさめ」(二四八頁)と心身の齟齬にとまどいを感じている。
やがて六条の君も一条右大臣邸に身を寄せることになり、そ
の際に一条権大納言に言い寄られる。童を介して度々の文が
あっても自らの身を「憂き身」と捉える六条の君は一条権大
納言の求愛を受け入れることはできず、「陸奥のまた道なら
ぬ錦木は色に染めきと人や名立たん」(二五四頁)、「いとどし
きまで名立ちならんかし」(二六一頁)と人目に触れて噂にな
ることを極度に恐れる。対の君や一条権大納言が「先の世よ
りの契りにや、監が聞きつけて『合ひ具して下らばや』と言

ひおこせしかば」(二四五頁)、「監などいふ猛きもののふに、
心安く見えたまへる宿世のゆゆしさよ」(二四九頁)と、大夫
監と結ばれた六条の君のあやくな宿世を指摘し、六条の君
自身もそれを「憂き身」として嘆く。そこに一条権大納言の
懸想が加わることによって、より一層身の憂さを感じ、「長
くも見交はしたてまつらん身かは」(二六〇頁)と、死を意議
するように変化するのである。

六条の君の心内描写が少ないため、彼女が一条権大納言の
求愛に対してどのような感情を抱いていたかを判断すること
は難しい。度重なる一条権大納言の手紙に対して「かしこ
(二六六頁の君)にはいとどもの憂くて、御返しもなし」(二六
七頁)と不快感を感じて返事をしていないことから、少な
くとも一条権大納言のことを恋しく想っているとは考えられ
ない。筑紫への帰途中に一条権大納言から届けられた文に対
しても「例の恥づかしげなる御手にて、様々のこと書かせた
まへるをも、『苦し』とおぼしなから」(二七一頁)と第一印象
象は迷惑に感じている。この文に対する六条の君の返答はた
だ一首の返歌であり、その返歌「数ならぬ憂き身沈むる淵瀬
にも見るめ苦しき波のうたかた」(二七一頁)には、自らの境
遇の辛さが表されているだけで恋愛感情を読み取ることがで
きず、一条権大納言への想いゆえに入水を選んだという解釈
は成立しないと考えられる。入水直前に六条の君が「せめ
てとぢめのほどとだに、我が魂の迷ひ出でてもがな」と恋し

き御心のあまりて」(二七二頁)と、死ぬ間際だけでも魂が恋しい人の元へ行きたいとの述懐を漏らしており、安道氏はこの恋しい相手のことを一条権大納言であると解釈している。

しかし直前にある和歌を始めとした六条の君と一条権大納言のやりとりを勘案すると、対の君や、対の君が暮らす都に對しての心情であると解することが自然であろう。一条権大納言に関しては、結局のところ恋愛感情を抱くことはなかったと考えられる。その一方で、「げに御容貌より始め、よろづ飽く世なき(一条権大納言の)御気色を、ありしながらの身にてしも見たてまつらましかば、あはれにもをかしうをあらんを、今は方々にうしろめたきほどにて、安からぬ嘆きや添ひてん」(二六〇頁)と、大夫監と結婚する前の、恐らく父が存命で後見になってくれたであろう時に一条権大納言の求愛を受けることができたならばよかったのにと仮想していることが読み取れる。これは六条の君は両親や対の君の体面を守るが為に一条権大納言への恋情を抑圧していたことを意味しているであろうか。次に一条権大納言側から物語を分析することにより、六条の君の心情を考察し、入水の動機を探る。

三 一条権大納言の人物像の変化

六条の君に関する物語を、一条権大納言の側から捉え直してみよう。そもそも一条権大納言は、父右大臣も「この人(一条権大納言)もいと若けれど、あだめく筋はかつがつ見

えず。」(八二頁)と、断言するように、言い寄る女性(女房)には全く手を出さず色恋に無縁であり(C)、「若きひとへ心におぼしとどめて」と京極三の君への想いを貫く一途な人物として描かれていた。

C : 明け暮れ近く見たてまつる若き女房などのそばれあへるは、心おさめかねて、さる気色なども見ゆれど、

(一条権大納言は)情けなき様にはあらで、ゆめ懸想じたまはねば、悩める人も多かりけり。(一五三頁)

京極三の君に對する一条権大納言の振る舞い・態度は、『源氏物語』の柏木の姿に類似しているとの指摘がある。特に、京極三の君入内後の一条権大納言は別離をひどく嘆くだけでなく、自らの関係が露頭することによって京極三の君に汚名を着せてしまうことを恐れるあまり病に臥せるようになる。例えばDを参照すると、波線部のように自らが生き永らえることは、三の御子の出生の秘密が露見する可能性があり、京極三の君に苦悩を与えることになってしまふと一条権大納言は考え、自らの死を望んでいる。

D : (一条権大納言)「せめて今一度、生きとどまることもや」とおぼし直せど、また、「しひて惜しかるべき身かは。なからむ後ろには、とあれ少し人(京極三の君)の御ためも目安からめ。おのづからこの御心どもにも、ありありてのさて後こそ、心憂きことは知らせたまはめ。さる世にめぐらへて御おもてぶせならんよりは」とおぼ

す。

(二二六～二二七頁)

これは次のEに示されるように、『源氏物語』において、女三宮が被る浮き名も、光源氏への罪悪感も自らの死によって消失するのでないかと考えを巡らす柏木の姿と酷似している。

E : (柏木)「：かく人(≡女三宮)にも少しうち惚ばれぬべきほどにて、なげのあはれをもかけたまふ人あらむをこそは、一つ思ひに燃えぬるしにはせめ。せめて(自分が)長らへば、おのづから、あるまじき名をも立ち、我も人(≡女三宮)も安からぬ乱れ出で来るやうもあらむよりは、『なめし』と心置いたまふらむあたり(≡光源氏)にも、さりともおぼし許いてむかし。よろづのこと、今はのとぢめには、みな消えぬべきわざなり。」
(柏木巻・二六八頁)

また、病床の一条権大納言を見舞った友人の宮の中納言が目にした一条権大納言の様子(F)は、夕霧の目を通した柏木の様子(G)と表現までほぼ完全なる一致を見ている。

F : (一条権大納言)「いと口惜しう、その人にもあらずなりにてはべりや」とて、烏帽子ばかり押し入れて、少し起き上がらんとしたまへど、いと苦しげなり。白き衣どもの、なつかしうなよかなるをあまた重ねて、衾引きかけ臥したまへるに、かくてもかの御香りのをかしう心憎げに匂ひ満ちても清げに、気配むつかしげなることゆなくて、はかなう瘦せさらばひたるしも、いよいよ

白うあてはかなるけして、枕をそばだててものなど聞こえたまふさま、いと弱げに見えたまへり。

(二二二～二三三頁)

G : (柏木)「いと口惜しう、その人にもあらずなりにてはべりや」とて、烏帽子ばかり押し入れて、少し起き上がらむとしたまへど、いと苦しげなり。白き衣どもの、なつかしうなよかなるをあまた重ねて、衾引きかけて臥したまへり。
(柏木巻・二九〇頁)

・重くわづらひたる人(≡柏木)は、おのづから髪髭も乱れ、ものむつかしき気配も添ふわざなるを、瘦せさらばひたるしも、いよいよ白うあてなるさまして、枕をそばだてて、ものなど聞こえたまふ気配いと弱げに、息も絶えつつあはれげなり。
(柏木巻・二九二頁)

その後、宮の中納言に正妻女二宮の後事を託していることや、一条権大納言と京極三の君の恋愛が一条権大納言の「悶死」と京極三の君の「出家」という結末を迎える物語展開において、『源氏物語』の柏木との類似が顕著である。さらには、一条権大納言が京極三の君に恋情を抱き始めた折に、京極三の君の大切にしていた鈴虫を京極三の君の兄に頼んで貰い受けており、この場面は、若菜下巻において柏木が女三宮の愛玩している猫を東宮(女三宮の兄)を通して借り受ける場面を模しているであろう。また一条権大納言が笛の名手であることや、一条権大納言の子であることを知った三の

御子も同様に笛の名手であり、亡父の笛を拝受することを望んでいふという設定は、柏木が笛の名手であるという人物設定（篝火巻）、柏木の遺愛の笛を落葉宮から譲られた夕霧の元に柏木の霊が現れ「笛竹に吹き寄る風のことならば末の世長き音に伝へなむ 思ふ方異にはべりき」（横笛巻・三三三頁）と、我が子に形見の笛を伝授したいと述べる部分、宿木巻にて薫が柏木の遺愛の笛を所持し、またとない音に吹き鳴らしたことが語られていることを踏まえており、読者に対して「一条権大納言＝柏木」という対応を印象づけていると考えられる。

このように、『夢の通ひ路物語』の主人公である一条権大納言は『源氏物語』の柏木との類似点を多く有しているが、京極三の君との関係は柏木と女三宮の関係のような不義密通ではなく、二人の間に生まれる三の御子も不義の子ではないという大きな相違点が存在する。そのため、一条権大納言あるいは京極三の君には、贖罪すべき罪は存在しない。さらに、一条権大納言と京極三の君の恋愛を妨げる重大な障碍は存在していない点も特徴的であろう。二人が結婚に至らなかつた理由は、一条権大納言の両親が皇女の降嫁を望み、京極三の君の亡父が入内を強く望んでいたことによる。両親の意向に添っていないという点において、両者の恋愛は人目を避ける秘せられた関係であったが、両親の反対が絶対的な障碍とならないことは、岩田中将が按察使大納言夫婦の不興を買いな

がらもかざしの君を妻にし得たことから明白である。しかし一条権大納言にとっては、両親の意向は非常に強い強制力を持っていたのである。

一条権大納言の両親は息子を溺愛しており、京極三の君への想いに沈んでいる姿を見ると気分転換のために嵯峨野行きを勧めたり、少しでも顔色を変えようと「いかなる筋の御悩みぞ」（二五頁）、「御葉など参らせよ」（二六頁）と、一条権大納言の言動に一喜一憂するのである。特に大宮は以下のHに見られるように「親につらい目を感じさせるようなことはしてはいけない」「将来までもまじめな行動をとるように」と厳しく訓戒しており、それは一条右大臣が一条権大納言の妻として皇女女二宮を降嫁させてもらおうと考えているからである。

H：：（大宮）「いづれと言はん中にも、我にな憂き目見せたまふなよ。若うおはする人は、何くれにつけて人の思ひなく言はむこと、な負ひたまひそ」：：（二六頁）
・大宮は、「人の親となりては、よろづに我が身のほどはさらにも厭はず、子の生ひ先のみを思ひるるぞかし。ことありて後、何くれと言ふ思ふとも、ひがごとならん。」

（一条権大納言は）まだ若くましますせば、行く末までも実法に心がけたまへ。：：（八二頁）

そのような折に、一条権大納言は京極三の君への文を大宮の前で落とすという失態を犯してしまい、「もしや大臣など

にも聞こえもせば」(七九頁)と、右大臣の意向に添わない京極三の君との関係が知られることを非常に恐れている。

それほどもでに一途かつ誠実な人物として一貫して描かれてきた一条権大納言であるが、六条の君が登場している間はその性格が豹変している。そもそも一条権大納言の容姿についてはIのように「光る」という修飾がなされており、光源氏がその優れた容貌によって「光る君」と称されたことを意識した設定(J)であると考えられる。また、一条権大納言と京極三の君の恋愛譚の物語展開や文章表現は、『源氏物語』における光源氏と藤壺女御の関係を模している点が指摘されており、一条権大納言と京極三の君との間に生まれた三の御子が真の出生を知り、今後の生き方を模索する際に自らを冷泉院になぞらえている点をも踏まえると、「一条権大納言II光源氏」という図式が成立するとも解釈できよう。

I 君(II一条権大納言)は桜の御直衣、紅綾の下襲、若やかなる御面持ち、ふとさし歩みたまふ御姿、言葉にもあまり、「光るなどとはかかるを言ふらん」と思ひまされる御人柄に：(二六頁)

J 「世にたぐひなし」と見たてまつりたまひ、名高うおはする宮(II藤壺)の御容貌にも、なほにははしさはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人「光る君」と聞こゆ。(桐壺巻・三五〜三六頁)

一章で分析を行った藤壺女御や六条の君と同様に、一条権

大納言についても『源氏物語』の光源氏と柏木という両名の設定が凝縮されていると考えることができる。京極三の君に對する一条権大納言が柏木的な誠実さ、小心さを有しているのに對して、六条の君に對しては光源氏の色好みや傲慢さが強く現れている。そのことを顕著に表しているのが、六条の君に言い寄った際に「誰召すとも、まろに立ち並ぶことあらじ。みな許されはべるを」(二五四頁)と、光源氏の女性に對する傍若無人な発言「まろは、みな人に許されたれば、召し寄せたりとも、なむでふことかあらむ。ただ忍びてこそ」(花宴巻・五三頁)を引いていることである。

実直であると思われていた一条権大納言は、六条の君の周辺的女性に對してのみ強い色好みを示し、京極三の君への訪れも途絶えがちとなる。このような一条権大納言の様子は、「まれ人の渡りしなど、おのづから聞かせたまひて、『いかなる人によ』と例の御癖にておぼし寄りて」(二四八頁)と「癖」という言葉を用いて表現されているが、この「癖」という語は『源氏物語』の帚木巻冒頭に記されている光源氏の性質を表す語を取り入れていると考えられる。色めかしく浮ついた恋愛に無関心であるという、まめ人としての「本性」に對して、「癖」は「稀にはあながちに引き違へ、心尽くしなることを、御心におぼしとどむる癖なむあやにくにて、さるまじき御ふるまひもうちまじりける。」(帚木巻・四五〜四六頁)に示されるように、情念にかられて恋愛を推し進めよ

うとする光源氏の強引な態度を象徴している。「源氏物語」においては、このような「癖」は光源氏の人間性を豊かにするものと捉えられており、単なる「欠点」ではないと考えられているが、一方で本物語においては、一条権大納言の「癖」は否定すべき性質として読者に呈示されているのである。

六条の君が入水した事を聞いた一条権大納言は、入水するほどに思い詰めた六条の君の心情を思いやるのではなく、美しい六条の君を喪失したことへの無念さをまず感じている。その上でK傍線部に見られるように「六条の君の入水によって自らの名が生田川伝説の二人の男のような立場にまで墮ちてしまうのか」という自己中心的な感想を漏らしており、このような一条権大納言の態度を草子地では「けしからず」と答めている。

K (一条権大納言)「さこそはおどろしき波も立ち隠ひけん、
我こそ血沼とや小竹田とや名に沈まん」と、いふかひなくおぼし寄るもけしからずや。(一七三〜一七四頁)

同じように、六条の君の死後間もなく、その姉である六条一の君に懸想する一条権大納言の姿についても「よし落ち葉なりとて、心の癖はさらに引きかなぐりえまじ」と例のあやしい御心とどめて聞こしめすも、誠にうるさしや(一八一頁)と「癖」という語で否定的に捉えており、「まことにうるさし」とその行為を非難している。

六条の君やその周辺の女性に対する一条権大納言の色好みな振る舞い、すなわち「癖」は、本物語の価値観としては決して褒められたものではなく、「まめ人」であるとされていた一条権大納言の欠点あるいは失態として否定的に示されているのである。

六条の君に対して一条権大納言は尊大に振る舞っており、恋愛感情にしても六条の君のことを思いやる心情には乏しい。粗暴な地方豪族の妻という現実に苦悩する六条の君にとって、都でもえり抜き貴公子である一条権大納言の求愛は亡父によって与えられた入内という夢に極めて近いものであつたはずであるが、六条の君に寄せられた恋情はその実、色好みによる極めて身勝手なものにすぎず、恋情を向けられた六条の君にとっても迷惑なものでしかなかった。このことは、大夫監と共に下向をする苦渋の決断を下した際に、一条権大納言の過去の無体な振る舞いを想起し、「いとよくも逃れしかなかかると方(一条権大納言)にても、さるうしろがみにこそあらんを」と我が御心からも、いとも目安うおぼす。(一六八頁)のように一条権大納言に直接言い寄られたがうまく我が身を守ったことだと安心している六条の君の姿に表れている。二章にて述べたように、「大夫監と出会う前に一条権大納言の求愛を受けていたならば素晴らしかったであろう」と思う六条の君であるが、その仮想の後に「今は方々にうしろめたきほどにて、安からぬ嘆きや添ひてん(一六〇頁)と、

一条権大納言の求愛という自らを苦しめる嘆きがさらに付け加わったと感じている。六条の君にとつての嘆きの元凶は大
夫監の対応であり、それに「添ふ」ということは、一条権大
納言の求愛も大夫監と同様なものとして扱われていると解釈
できよう。六条の君の窮状・苦悩を理解しようともせず、垣
間見した容姿に対してのみ執着を示す一条権大納言の姿は、
突き詰めると粗暴な大夫監の独占欲と同一のものであると六
条の君は気づき、絶望した末に入水という手段を選んだもの
と考えられる。仮に一条権大納言の求愛を受け入れたとして
も、そのことが自らを大夫監から解放し、幸福をもたらして
くれるわけではなく、それどころか更なる苦悩をもたらすと
悟った六条の君にとっては、もはや世の中に身の置き所が存
在しなくなってしまうたのである。かくして六条の君は一条
権大納言を受け入れることなく、大夫監とともに去り、その
途上にて入水を選んだのである。

四 『夢の通ひ路物語』における結婚観

本物語には、妙齢の女性が多く登場する。京極三の君、か
ざしの君とその娘かざしの姫君を始めとして、藤壺女御、六
条の君といった女君たちは物語内での描写も多く、恋愛ある
いは婚姻に関するストーリーが展開されているが、かざしの
君（とかざしの姫君）以外の女性は全て親（あるいは親代わり）
の希望に添った婚姻を行った結果、幸福とはいえない生涯を

送ることとなっている。

女君の父親の多くは、娘の入内を望んでいる。例えば「い
かで上にも奉らばや。言ふくづるばかりにはあらねど、極
めてあてなる御後見もあらで、こととある折苦しうものした
まはんもかなしく、かかるほどにて朽ち果てたまはんは、い
とかひなかるべき」（二二～二三頁）のように京極大納言は京
極三の君の処遇について、何が何でも入内をさせることを望
み、長女の婿三条中納言に対してその旨を遺言し、三条中納
言もそれを叶えるために尽力する。親の希望に沿って入内し
た京極三の君や藤壺女御はその結果、幸福を得たとは言いが
ない。藤壺女御は一の御子を出産するものの、他の皇妃の嫉妬
により死に至る。帝の寵愛深い三の御子を生んだ京極三の君
の不幸については言うまでもない。

このように、入内は女君本人の希望というよりも、当然の
ことながら親の願望としての面が強く、本物語はそのような
親のエゴ（政略結婚）を否定するような世界観を示している
と同時に、時代的にも入内の持つ意味合いが失われつつある
ように思われる。一条権大納言も、同様に両親の意向によっ
て女二宮を正妻として迎えることになるが、そのことが京極
三の君との別離をもたらし、やがては一条権大納言自身が悶
死する原因となったことを踏まえると、やはり親の意向に
沿った婚姻は良い結果をもたらさないものとして描かれてい
ることがわかる。

そのような親たちのなかで、京極三の君の母入道宮のみは女の幸せというものを激しい競争にさらされる入内に求めず、一条権大納言のような誠実かつ一途な人物との婚姻を望ましいという価値観を持っている(一)。

「(入道宮)「女といふもの、いづれか物思はで、過ごしたまはんはなう、心交はしきこえたまはんほどだに、そなたかなたにあまた通ひ所持たらん人に見せたてまつらんは、うしろめたきぞかし。まして、輝きたつる御ほとり(≡宮中)に交じらひて、いづれにつけて心苦しう、我も人も罪得るはしなれば、只人のやごとなきに見せたまへ」」(二二頁)

そして京極大納言の死後に入道宮は「今の世にこの君(≡一条権大納言)ならで、おぼえよき人やあらん。かくまでおぼし寄りたるも、いとうるはしければ」(六三頁)と、一条権大納言の求愛を容認し、娘婿候補として考えており、もしそれが実現していれば相思相愛の仲が幸福に繋がりが得たと想像することは難くない。岩田中将とかざしの君についても「誠にまめなる御心ざしを尽くし」(六六頁)た貴公子と「御母宮に後れたまひて、はかばかしうよろづとり行ふ御後見もな」い「宮腹の姫君」(六四頁)の婚姻が最終的には幸福をもたらしている。かざしの姫君と結婚した三条少将についても、「いづこにも御女など持たたまへる公達、おぼし寄りたまへど、若き(三条少将の)御心地に、この山里の曙、もの

心細き黄昏を眺め暮らしたまふ人(≡かざしの姫君)の御上いたく「あはれ」とおぼしなりにし御心の、引き替へ移るべくもあらで、やがて『この姫君(≡かざしの姫君)を』とおぼす。』(二八〇頁)と、一途にかざしの姫君を想い、自らの意志で結婚を決意している。この結婚に対して三条少将の祖母入道宮も父三条中納言も、また岩田中将も手放して祝福していることから幸福な結末が類推でき、本物語において肯定されているのはこのような男の誠実さが現れた釣り合いの取れた婚姻であると考えることができよう。

不幸な婚姻という点においては、本稿で取り上げた六条の君も引けを取らない。最終的には入水せざるを得なくなった彼女の不幸の源は、入内を望むという親のエゴに端を発し、その一方で現実の婚姻相手は品の下がる相手であることに起因していると考えられる。親に対する孝心の厚い六条の君は、入内させようという親の意志を尊重し、自らも期するところがあつたにもかかわらず、現実には大夫監という非常に品の下がる相手との婚姻に甘んじざるを得なかった。そのことが六条の君の心身をむしばみ、都にて静養することとなった。その際に、一条権大納言という帝に次ぐような優れた貴公子から求愛される。これは六条の君にとって、本来であれば喜ぶべきことであるのだが、一条権大納言の求愛がその実は粗暴な大夫監の身勝手な恋情と同様の、遊びに過ぎないものであると悟り、その絶望が入水という手段を採らせたと考えら

れる。

このように、本物語における恋愛・婚姻を分析した結果、入内や皇女降嫁といった高望みは全て望ましくない結果に終わっており、むしろ誠実な相手との恋愛・婚姻こそが幸福の源であると肯定的に表現されている。このような恋愛観・婚姻観は、以前に本物語の主題として示した三の御子の人生選択とも通じる部分が多く存在している。真の出生を知り、己の価値観をうち砕かれた三の御子は出家にその解決方法を求めようとするが、そのような三の御子に対して吉野の阿闍梨は「何事も世にまかせ、時至るべきをこそ待たせたまひぬべけれ。」(二八六頁)と、自らの立場をわきまえ、時勢を見極めてから行動する大切さ、つまり「身の程にあった生」という指針を示している。これは、実父である一条権大納言が三の御子の出生の秘密を隠すのではなく、巻物を通して積極的に三の御子に伝えようとしたことの帰結でもある。その結果、三の御子は皇位継承を忌避し、一皇族としての生を選ぶと同時に、一条権大納言のことを真の父として許容するようになる。このように自らのありようを肯定することこそが出生の秘密という三の御子の苦悩を軽減する最良の道であるという価値観が示されている。

婚姻そのものが幸福をもたらし得た人物としては岩田中将とかざしの君がおり、三条少将とかざしの姫君についても幸福な将来を予見することができる。前者は身分的には釣り合

う間柄であるが、かざしの君の父である按察使大納言と継母には快く思われておらず、それがために岩田中将は流罪の憂き目に遭うこととなった。流罪の間も岩田中将は自暴自棄になることなく、信心を失わずにいた結果、最終的には住吉神の加護を得ることができ、都に召還された後に幸福を掴み得ている。

このように、本物語においては、「釣り合った相手」との恋愛・婚姻こそが幸福の原点とされているのに対し、入内や皇女降嫁といった両親の思惑に沿った婚姻では満たされることがないものとして描かれている。さらに、否定的に扱われている恋愛関係として、「形代」を挙げるができる。一章での藤壺女御の分析の際にも示したように、六条の君や京極三の君の不幸は、藤壺女御に執着する帝の形代探しによってその引き金が引かれたと言っても過言ではない。

帝は、亡くなった藤壺女御に似通う京極三の君を入内させ、寵愛する。さらにはその所生の三の御子を溺愛し、やがては皇位継承者に擬するまでになる。亡くなった藤壺女御を偲ぶために探し求めたはずの京極三の君に対して、やがてはのめり込み、また世間の人々から見ても「引き越して、ようせすは坊にもるたまひぬべきにや」(二九頁)と感じられるほどに京極三の君所生の三の御子を甚寵する帝の態度は、藤壺女御への執着が果たして真実の愛情であったのかを疑わせるに足るものである。藤壺女御の死後落ち込んでいた帝が、藤壺

女御の容貌に似ている京極三の君の存在を示唆されると、「そこはかと移るとはなき(帝の)御心なれど、さる(亡き藤壺女御の)気配のうち添ひにたるをぞ、またゆかしうおぼしとどめ」(一九九―二〇〇頁)と興味を持つ。このように形代などという存在を必要とすることは、藤壺女御という人格を愛していたというよりも、「さる気配のうち添ひにたるをぞ、ゆかしう」という表現に現れているような外面的な部分に対する執着に過ぎなかつたのであり、これは大夫監や一条権大納言が六条の君に対して抱いた感情にも通じるものであろう。一条権大納言もまた、六条の君の入水後にその姉である六条の一の君に興味を持っているが、それは「いかで見なん。人げなき波に世をとぢめし人(六条の君)も、『容貌いとよし』と聞こえしぞ。これ(六条一の君)もけしうあらじ」、「ゆかり残れるさまならば、いかに嬉しからまし。」(二八一頁)と六条の一の君に亡き六条の君の面影のみを求めているからである。このような態度は当の六条の一の君に対してのみならず、亡き六条の君に対しても表面的な好意を抱いていただけであつたことを示唆するものであり、そのような一条権大納言の態度は草子地においても「まことにうるさし」と非難されているのである。

おわりに

本稿では、特に六条の君に関する物語と主題との関わりに

ついて六条の君の心理描写および一条権大納言の人物像の変化に着目して分析を行い、その結果を基として『夢の通ひ路物語』における恋愛観・婚姻観に関する考察を行った。

本物語は登場人物に『源氏物語』の複数の登場人物を投影させており、六条の君物語においても玉鬘、浮舟、特に空蟬の人物造型を大きく模している。しかし空蟬は光源氏に惹かれつつも、受領の妻となつてしまつた我が身の宿世を再認識し、その無念さを受け入れようとしたのに対し、父在世時には入内を期待されていた六条の君は、理想に適つた貴公子一条権大納言の求愛を受け入れることなく、むしろ一条権大納言の求愛によって自らの境遇の不幸さを再確認し入水してしまふ。なぜならば、一条権大納言の六条の君への想いはかりそめの「遊び」にしか過ぎず、大夫監との結婚という現在の身の不遇から解放してくれるような、真剣な恋愛でなかつたからである。一条権大納言の人物造型は、柏木の他、光源氏の影響を受けており、特に六条の君周辺の女性に対しては光源氏の否定的特徴「色好み」という要素が強く表れていることがわかつた。

また、本物語に登場する親たちは入内というものを「女の幸」と捉えており、女性たちは異を唱えることなく親の意向に従っている。一条権大納言についても京極三の君との恋愛を秘さなくてはならないほど親の意向は絶対的であつた。このように親のエゴによって結婚をした登場人物たちは不幸に

なる場合が多く、逆に親の反対を押し切り、あるいは自らの意志によって決断を下した結婚については幸福な結末が描かれていた。これは真の素性を知らされ己の生き方を模索する三の御子に、阿闍梨が教え諭した「身の程に合った生き方」を象徴するものであるであろう。

光源氏は、実に多くの女性と恋愛を愉しみ、全ての女性に誠実な対応をしたことが賞賛されているが、この物語ではそのような多数への愛は偽善的なものとして否定されていると言えよう。これは、六条の君に対して一条権大納言が色好みの気持ちで接することが否定的に描かれているからのみならず、一条権大納言が六条の君や他の女性に興味を持って気を移したとたんに京極三の君が入内させられてしまったという物語展開にも象徴されている。その一方で岩田中将や三条少将のような一途な愛が肯定されており、恋愛をゲームのように愉しむ王朝的価値観はもはや失われていると言えよう。『源氏物語』の設定や文章表現を大幅に流用し、登場人物の行動を似せながらも、最終的には光源氏のような生き方・考え方を否定することによって、真摯で堅実な人生をよとずる本物語の価値観が強く主張されているのである。

* 『夢の通ひ路物語』の本文は、『鎌倉時代物語集成 第六卷』（笠間書院）に拠り、表記は私に改めた。

その他の引用に関しては以下に拠り、表記は一部私に改め

た。

『源氏物語』：新潮日本古典集成（新潮社）

注

- (1) 拙稿「夢の通ひ路物語」主題分析―物語構造と源氏物語撰取の背景―（『講座源氏物語研究四』おうふう・二〇〇七年六月）
- (2) 木村公子「夢の通ひ路物語」の年立と脱落に関して（『名古屋大学国語国文学』三八・一九七六年六月）、塩田（木村）公子「夢の通ひ路物語」の一考察―かざしの君をめぐる―（『後藤重郎教授周年退官記念国語国文学論集』名古屋大学出版会・一九八四年）、同「夢の通ひ路物語」成立考」（『名古屋大学国語国文学』五六・一九八五年七月）
- (3) 木村氏（前掲注）(2) 論文、塩田氏「濡れ衣と流罪の物語―『擬古物語』を中心に―」（『後藤重郎先生古稀記念国語国文学論集』和泉書院・一九九一年）、安道（淵野）百合子「岩田中将流罪の物語の創作基盤―『夢の通ひ路物語』における先行物語撰取の方法―面・統考―」（『古代中世国文学』九・一九九七年三月）
- (4) 塩田氏「夢の通ひ路物語」成立考」（『名古屋大学国語国文学』五六・一九八五年七月）、淵野氏「『夢の通ひ路物語』の構想に關わる一視点―『権大納言系物語』と『かざしの君系物語』の融合度―」（『国語の研究』一九・一九九三年九月）
- (5) 拙稿「夢の通ひ路物語」主題分析（二）―岩田中将・かざしの君物語の意義―（『詞林』四四・二〇〇八年十月）
- (6) 前掲注（5）論文
- (7) 工藤進思郎「夢の通ひ路物語」（福武書店・一九七五年）所収

解題、同「中世物語における『源氏物語』の撰取に関する一考察——『夢の通ひ路物語』の場合」(『源氏物語の探究三』風間書房・一九七七年)、塩田氏「男と女の夢の通い路」(『国文学』三五—一九九〇年一月)、安道氏「『夢の通ひ路物語』における先行物語撰取の方法——一面——六条の君物語の創作基盤——」(『古代中世国文学』八・一九九六年五月)

(8) 工藤氏(前掲注(7)) 論文

(9) 安道氏(前掲注(7)) 論文

(10) 前掲注(7) 論文など、『夢の通ひ路物語』の『源氏物語』取りを指摘した論文は枚挙に暇がない。

(11) 工藤氏(前掲注(7)) 論文

(12) 淵野氏(前掲注(4)) 論文

(13) 工藤氏(前掲注(7)) 論文

(14) 安道氏(前掲注(7)) 論文

(15) 藤田弘美「『夢の通ひ路物語』の一条権大納言の人物造形——『源氏物語』の柏木像との比較——」(『日本文学研究年誌』創刊号・一九九二年三月)

(16) 本稿での『源氏物語』引用は新潮集成に拠り、柏木巻は尊経閣文庫蔵本を底本としている。この「あてなるさまして」の部分は、『夢の通ひ路物語』の本文と厳密には一致していない。『源氏物語大成』(中央公論社)を参照すると、当該部分は横山本・榎木家本・陽明家本・肖柏本・三条西家本・河内本・御物本・麦生本・阿里莫本では『夢の通ひ路物語』と同様の表記「あてはかなる」となっており、その中でも三条西家本は、その後にくく「さまして」の部分のみセケチ修正をして「けして」と表記し、『夢の通ひ路物語』と完全に一致している。『夢の通ひ路物語』の

『源氏物語』引用本文、そして成立年代を比定する際に参考にする情報であると思われる。この点に関しては稿を改めて考察を試みたい。

(17) 工藤氏(前掲注(7)) 論文

(18) 榎原茂子「源氏物語論」(等閑書院・一九六九年)、秋山虔「好色人と生活者——光源氏の「癖」——」(『王朝の文学空間』東京大学出版会・一九八四年)

(19) 前掲注(1) 論文

(いのもと・まゆみ 本学大学院博士後期課程単位取得退学)